

# DRAMA かながわ 76

神奈川県演劇連盟事務局：神奈川県横須賀市米が浜通1-3 Tel.045-263-4472

## いま この瞬間 かけがえのない

文：studio salt 椎名泉水

青少年のための芝居塾『万!万!歳! -2018ver.-』 作・演出：椎名泉水  
2018年8月25日(土)～26日(日) 神奈川県立青少年センター 紅葉坂ホール



劇団として「青少年のための芝居塾」を担当するのは最後にしようと考えていて、芝居塾2016、芝居塾2017、そして芝居塾2018と、これまで担当してきた3年間の集大成的な公演になればいいなと思いき、芝居塾2018「万!万!歳! -2018ver.-」公演に臨みました。作品として前年度に好評をいただいた、芝居塾2017「万!万!歳!」の再演という形をとったのですが、様々な要因が重なり塾生の人数が芝居塾2017の時の半数弱しかおらず、その意味で演出を芝居塾2017から大幅に変更しなければなりませんでした。引き続き会場は800人収容の紅葉坂ホールということで、少ない人数であってもそう感

じさせないように、開場時から黒幕を下ろし壁のように見立て、舞台美術を舞台前面に集約させ、特別養護老人ホーム内のテーブルの配置を横に広げることで空間を極力埋めるように調整し、大切なワンシーンでのみ、黒幕をあげて舞台の奥行を見せる、歌唱シーンでは本来歌う設定のない出演者もパネルの裏に仕込んでもらったマイクに向かって見えないところで歌って全体の声を足す、など演出的な工夫をしました。また、声の小ささを指摘された初演時の反省から、塾生たちには初期稽古の段階で発声の講習を組み込み、稽古毎に必ず発声とリズム表現のレッスンをアップ代わりに実施しました。



4ヶ月程度のレッスンで発声が身につくわけではありませんが、全く声が出なかった塾生が大きな声で台詞が言えるようになるなど、各塾生の中でそれぞれのレベルでの成長がみられ、充実感があつたようです。

「万！万！歳！ -2018 ver.-」は戦争を扱った作品で、過去の終戦のイメージシーン～現在のオリンピック会場シーンで国歌として歌われている「君が代」について、外国人である塾生から「私の家族や親戚は君が代について悪い印象を持っている、だから私は家族や親戚はこの公演に呼べません」と言われ、この作品の演出的な意図の説明と、君が代という歌が戦争の時代と、自由な生き方が選択できるようになった現在とではこんなに意味が変わってしまうんだという表現で、それは今の時代に老人ホームで体操の曲として歌われている「汽車ポッポ」が戦時中は「兵隊さんの汽車」として兵士を戦地へ送り出す歌だった、という部分ともリンクさせていて必要な表現なんだと伝えるも理解してもらえず、その塾生とはしばらく平行線な雰囲気

が続きまして。しかし、稽古を重ねていく中で、徐々に変わっていき、最終的には家族、親戚の方達を多数客席に呼んでくれ、その方達から作品を高く評価していただき、DVDの先行販売の予約を複数枚入れていただくなど、その塾生も終演後に作品に対する手ごたえを感じていたようでした。その塾生が芝居塾2019に申し込んだのを知り、4ヶ月間、彼ら、彼女らに真正面から向き合っ、ぶつかり合いながらも作品を創りあげていくことの本当の成果は「彼ら、彼女ら」が芝居塾が終わったその後も「演劇を続けてくれること」なのかな、と感じています。

実際に、ほとんどの塾生がその後も演劇になんらかの形で関わってくれていて、折に触れそれぞれの場所での活躍を耳にして、頼もしく嬉しく思います。また、私達も担当劇団として参加させていただく中で思いがけない発見や、忘れていた想いに気づかされ、成長できたと思っています。メンバーが仕事を休んで4ヶ月間芝居塾に関わっても予算がつかず、ほぼボランティアのような状態で始まり、稽古場も自分達で有料で確保しなければならぬなど、初期の頃には不満があつたのも事実ですが、自分達なりに、少しずつ改善されるよう各所へ働きかけ、最後の芝居塾2018では稽古場をほぼ確保していただいたり、様々な情宣に協力いただき、TVKのサブチャンネルで作品が全編放映されるなど、神奈川県演劇連盟の事業としての「青少年のための芝居塾」の認知に微力ながら貢献できたとしたら幸いです。かけがえのない貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

## 芝居塾『万！万！歳！ -2018 ver.-』

文：虹の素 熊手 竜久馬

千秋楽を見たあと、ああくそ！と思った。「みんなこの素晴らしい作品を見てくれ！」と声高に発信しようにも、この作品が上演されることはもうない（また次の再演を待たなければならない）もっと早い回……初日を観劇できたらよかった。もっとというなら、昨年芝居塾も見ればよかった。

舞台は介護老人施設。塾生は皆、紙袋(?)の覆面をし車椅子に座っていた。せつかくの「青少年」なの

に、皆が老人？しかも顔が見えない。どういうことだ？と思いながら見始めた。介護される老人たちの動作やしゃべり方など、とてもよくできていたように思う。若く活発な身体を、不自由に扱うことは、とても難しいことだと思う。それがよく訓練されていた。けれどこのまま最後まで続くのはせつかくの塾生のエネルギーがもったいないなと思った頃、物語は動き出す。音楽とともに、老人たちは覆面を外し、車椅子から跳



ね起き、自らの足で走り回り、高らかに歌い踊る。そこには生きる熱があった。施設の体操の時間に「汽車ポッポ」の音楽に合わせて腕をわずかに動かすのが精一杯だった老人たちが、生きている喜びを感じながら思い切り手足をばたつかせる。その笑顔。思わず、いやいや君達、もともと動けるじゃないか。なんてことを思いながら。

そして場面は「汽車ポッポ」を通じて、戦争の時代を思い起こさせる。今でこそ「汽車ポッポ」の歌は、幼児と楽しく歌う易しい童謡だ。私自身、幼児期は特に電車が好きだったこともあり、よく歌っていた記憶がある。実はこの歌、戦時中は、兵隊さんを送り出す歌として歌われていたのだ。(ということ、私もこの作品を見る2年前くらいに聞いていた)「トンネルだ トンネルだ 楽しいな」の部分は「兵隊さん 兵隊さん 万々歳」という歌詞だった。私たちが当たり前のように知っていて当たり前で歌っている歌が、昔はそうでなかったということ。今当たり前で生きているこの命が、いつか当たり前でなくなる時が来ること。この作品は、「時代」と「自身」と、2つの側面から、

生きていることや当たり前を改めて見つめることにとても積極的であると感じた。私は思わず涙がこぼれた。胸が熱くなって、終演後のロビーでスタジオソルトの方々に握手を求めて「とても素晴らしかったです」と伝えた。そういえば、万歳なんて滅多にしないな、最後にしたのはいつだろうなんて考え、紅葉坂を下りながら、心の中で万歳をした。



## 芝居塾『万！万！歳！ -2018ver.-』参加者の声

芝居塾は自分を変えるきっかけになりました。プロの劇団と公募で集められた塾生たちと稽古を重ねる毎に、ここはこう変えた方がいいと話し合いをする時間がとてもかけがえのない時間でした。今まで一歩後ろから何も意見を言えず立ち尽くしていた自分を変えてくれたのが芝居塾です。芝居と向き合う力を得られた夏でした。終演後、汗だくになりながらお客様に挨拶した際、たくさんの方が様々な意見をくださり、心の底から芝居を作ることが楽しいと感じました。(河合咲季)

芝居塾ではプロから直接指導を受けることができ、互いの演技、意見をぶつけながら本気で芝居をする環境がとても良かったです。稽古をしていく中で悩みや本音を言い合える塾生に出会えたことは1番の財産になり、壁にぶつかっても乗り越えることができました。本番は一瞬にして過ぎ去り、しばらくの間は余韻が忘れられませんでした。5ヶ月間芝居塾で過ごした時間は色濃く、忘れることのできない時間になりました。(杉山初芽)

日々を情熱的に生きている劇団員や演出家から教わったことは演技はもちろん生き方をも考えさせられ、彼らに出会えた事で私の人生観が大きく変わりました。稽古期間中は「役に魂を込める」ことを日々考え、本番直前まで体現する難しさに悩み、泣いた日も数多くありましたが同じ塾生に支えられ無事に本番を迎えることができ、この経験を活かした新たな出会いとステージへ導いていただいた事に御礼申し上げます。本当にありがとうございました。(アヤリ)

# 神奈川県演劇連盟合同公演『鳥になった少年』

作:高津一郎(劇団麦の会 元代表) 演出:横田和弘(劇団河童座)

2019年2月23日(土)・24日(日)神奈川県立青少年センター 紅葉坂ホール

文:劇団河童座 横田和弘

## 『鳥になった少年』は 怒りの戯曲！

故高津一郎氏の追悼合同公演が上演された。2017年6月29日の突然の訃報から一年半以上の時が流れていた。神奈川県の大重鎮としての高津さんの死を信じられない想いと受け入れられない想いのせいであろうか……。

私が演出に指名されて台本選びも任されて 何故『鳥になった少年』を選んだのかをまず記しておきたい。選定理由に三つの想いがあった。

一つは 生前高津さんと多くの時間を戦争というものの、高津さんの戦争体験などの話で費やした。そこでいつか高津さんの現代への忠告としての戦争に対する集大成を書いて欲しい。それが一つ目の理由。

私が 鮮烈に戦争の悲惨さを教えられたのが、高津さんに渡された、パプア・ニューギニア戦線の本でした。敵と戦うこともなく ただひたすらジャングルの中を歩き回されそのほとんどの兵士が飢えとマラリアで死んでいったと言う。その魂が今でも日本へ帰りたいたいの思いで海底を歩き続けているとその本には綴られていた。まさにこの『鳥になった少年』はそのパプア・ニューギニア戦線の数少ない生き残り 会田宗十郎を中心とした作品であることが二つ目の理由。

そして、三つ目の理由は、かつて県演連の合宿の戯曲研究会でのこと。高津さんが戯曲は怒りが書かせるものなんだ！とおっしゃった言葉が 私には忘れられない一言となっている。

この戯曲の登場人物は 全ての人が怒っている。戦争に対して、社会に対して、権力に対して、そして人間に対して……。それぞれの登場人物が想い想いの怒りをぶつけている。その『怒り』こそがこの戯曲の原動力だ。それは勿論高津一郎氏の『怒り』に違いない。重い話である。辛い話である。笑い一つない芝居である。高津さんはいつも戦争という大きな荷物を背負いながら、深く人間の深層心理を見つめながらの演劇人生を歩んでいたとの私の思いからであったのです。この作品は救いようのない話である。救いようのない話の大元は全て『戦争』である。そして戦争はまだ終わっていない！高津氏はそれを描きたかったのであろうと



思う。若い人たちにそれを知って欲しかったのだと思う。

最近、高津さんが、しきりに戦争前の日本とよく似ているといていた事を書き添えておく。

久しぶりに十劇団が集まった合同公演であった。老いも若きもが集まった稽古場は 芝居とは打って変わって 楽しいものであった。

私の特に思い出深いシーンは、宗十郎役の老舗劇団蒼い群の大ベテラン村田次郎氏と、若手劇団虹の素の高校生 宮本悠我君との壮絶なるラストの二人の息絶え絶えのバトルのシーンだ。二人の鬼気迫る演技は稽古場を含め 忘れられないシーンとなった。

あと、個人的に気に入って力を入れたのが 夜のカーニバルのシーンだ。虐げられた、どこかに傷を持つ人間たちの 鬱憤を晴らす爆発が 上手から下手へと、叫び踊り狂う短いシーンだ。

数々の反省点もあるが、数々の悪戦苦闘を乗り越え、ここまで来れたのは参加者のエネルギーに支えられてここまで来た。全ての関係者に感謝したい。流石に 重い 暗い声が多かったが、こうした現実にあった暗い時代、そして今、そして未来に掲示を示す真っ向勝負の芝居があってもいいと思っている。そしてそれが戦争体験者の高津さんの意志であると信じている。

最後に やはり普段交流のない人たちと芝居を創ることは楽しい。この場を与えてくれた高津一郎氏に感謝 感謝です。そして 改めてご冥福をお祈りします。



# 合同公演『鳥になった少年』

文：虹の素 熊手 竜久馬

連盟の加盟団体も増え、なるべく全劇団が関わりを持つようにと、各劇団より出演者の集った今回の合同公演。「合同公演」の名の通り、客席から見ている、合同公演の意義がある公演だったと感じる。センターのホールの回り盆に段差が生まれ、角度を変えながら様々なシーンが実に見やすく効果的に転換され描かれていたと思う。1944年の戦時中のパプアニューギニアと、1983年の山下公園のホームレス襲撃事件。戦争はもちろんのこと、ホームレス襲撃事件も、私がまだ生まれるより少々昔の話。

そんな時代の面影を感じさせるこの作品に、どうしてもピンとこない部分があるのは仕方のないことだと思いつつ、けれど舞台上にいる役者の多くは当然それら時代を私よりより肌で感じてきた人たちだ。そんな人たちが放つ、オーラと言えればいいのか、気迫と熱のこもった芝居には、とてもグッと来るものがあった。皆一様に、芝居に真摯だと強く感じる。演劇が好きなのだともものすごく感じる。多分、連盟に所属している団体の方々にとってはそんなの当たり前のことだ

ろうと思う。しかし、私が見ている小劇場の世界ではそんな風を感じるの方が稀になったなあと思う。そして何より、大先輩方の味と深みのある芝居は、さすが歳月の功だなと思った。私たち虹の素には出せない。だからこそこの合同公演は楽しいのだと感じる。今回、虹の素からは2名出演させてもらったが、団員は会うたびに稽古場の話をしてきた。誰々の芝居がいいとか、このシーンがいいとか、ここはこうだなあだと。ああ稽古場でたくさん出会っているのだと感じていた。私自身も、本番の作品というところを通して、私の知らない世界にまた一つ出会うことができたことを嬉しく思う。

最後に、主宰バカを存分に発揮させていただくが、今回の合同公演にて所謂「鳥になった少年」役を演じた、宮本悠我は難しい役所ながらよく演じきったと思う。上演時まだ高校在学中の若者が、連盟の大先輩方に囲まれてまた一回り大きくなった姿を見ることができたことは純粋に嬉しかった。本人への賞賛と座組の皆様への感謝を改めてこの場に記すことにします。

## 合同公演に出演して

高津一郎氏の追悼公演と言うことで出演を決めた。高津氏の本の戦争における殺人と現代で起きた少年による殺人については重く暗い出来事だが、これが現実だと言う事を受け止めたいと思った。そして私たちが今の時代に何が出来るのか、改めて考える機会を得た事に感謝したいと思う。高津氏からのプレゼントのようだった。今後の合同公演が更に楽しみである。(まりこ☆みゅーじあむ 川井真理子)

稽古も大変だったが加盟劇団の多くの人と知り合いになることができ良かった。私はもともと公演の成功、不成功はともかくとして、短い稽古の時間であっても皆が努力することに意義があるものと考えている。結果よりも努力する姿が今後の合同公演にも生かされるといいなあと思う。(劇団蒼い群 村田次郎)

戦争を知らない世代のわたしたちが、戦争を体験した高津一郎さんの想いをどれくらい伝えることができたでしょうか。はじめは緊張だらけで、個性的な共演者のパワーにただただ圧倒されていましたが、みなさん自分の親のようにいろいろなことを気にして声をかけてくれました。素敵な方々に出会えたこと、ご縁に感謝。いつかまた、いっしょにお芝居できたらうれしいです。(劇団河童座 渡辺奏)

わくわくして稽古に臨みました。悪役…だったのだと思いますが、慧は絶対悪ではありません。大好きだった家族の崩壊、悲しさ辛さ、理解してくれない周りに狂ってしまった慧。彼との出会いは私の新しい挑戦の始まりでした。自分の芝居を新しく広げられた事。県演連の他団体の人たちと出会えた事。そして青少年センターの紅葉坂ホールに立てた事。とても素晴らしい公演との出会いでした。(虹の素 宮本悠我)

# 劇団紹介

神奈川県演劇連盟に新規に加盟した劇団を紹介致します。

## 劇団「無題」

劇団「無題」は、社会人中心の小劇団です。『楽しく・ゆかいに・一生懸命』をモットーに湘南台、横浜付近で活動しています。舞台本番、普段のお仕事、呑み会等々、一生懸命頑張っています。

お客様全員が楽しめるような分かりやすくエンターテインメント性の高い作品を目指し、コメディ、サスペンス、感動系など、色々なジャンルで幅広い作品作りを心がけています。



## プラスチックな月



1998年に神奈川県大和市で旗揚げ。2011年より「落語」の演目を大胆にアレンジした「自称ロックオペラスタイル」を演じる劇団となる。2017年3月の神奈川演劇博覧会に初出演。2018年より神奈川県演劇連盟に加盟。悪ふざけバラエティを旗印になんでもアリの笑いの絶えない舞台をお送りしています。

## マシュマロ・ウェーブ

TAKに新たに加入しました「マシュマロ・ウェーブ」です。1986年4月に早稲田大学の学生劇団で活動していたメンバーを中心に結成しました。相鉄本多劇場、みなとみらいテント劇場、横浜ベイサイドスタジオ、箱根俵石閣等で、33年間で85回の公演をおこなっています。集団創作による作品づくりとカナダ演劇の翻訳上演を2本柱に100回公演を目指して地道に活動を続けていきます。よろしくお願いします。





# 僕らの演劇

## まりこ☆みゅーじあむ

「まんまる魔女のわんだーらんど」作/演出:川井真理子

2018年8月26日 於:のげシャール

今回の演目「まんまる魔女のわんだーらんど」は、赤ちゃん～大人まで皆で楽しめる内容。小さな楽器はキーボードの生演奏、ことば遊び、舞台を創



る「あそびば」を創ってみよう。一緒に工作、そして楽しいおはなし。もりだくさんの「楽しい時間」をお届けします。アリスではない、わんだーらんど！ まんまる魔女のわんだーらんど！まんまる魔女を名乗るまりこさんの多彩な切り口で15年間、こどもたちとそして大人たちと向かい合ってきました。県演劇連盟のメンバー劇団でこどものことばあそびと小さなお芝居を続けているまりこ☆みゅーじあむの存在は貴重だとも思います。

徹底した手作り感のある舞台、こどもたちがおおきな声で「そーだ村の村長さん」そーだむらの そんちょうさんがそーだのんで しんだそーだ・・・」を合唱する風景がわたしは好きだ・・・

がんばれ！！ まりこ☆みゅーじあむ！劇評のはずが応援メッセージになってしまいました。アマチュア演劇の本流をゆく劇団のあることを心強くおもいます。

横浜小劇場 荒井賢一

## 劇団蒼い群

「ファッションショー」 作:木庭久美子、演出:福本幸男

2018年11月10日～11日 於:横須賀市立青少年会館ホール

テレビのニュースでは秋の園遊会が映っていて、演劇界からは三谷幸喜が招待されている。三谷幸喜の陛下へのお言葉がおもしろい。そんなニュースの残像が頭に残りながら、



横須賀の青少年会館大ホールに向かって急な坂を上がり、横須賀でも老舗の劇団「蒼い群」の第62回公演「ファッションショー」を観劇した。しかし、劇団の寿命は短い、62回の公演には頭が下がる。舞台セットは老舗劇団らしく、リアリズムと置物の配置で新劇の舞台のようである。

あらすじは、「とあるマンションで大金を貯め込んだお婆さんと、間借り人のお婆さんと、大金をだましとる詐欺師

と、その詐欺師を狙った詐欺師の人間模様を描いたコメディ。振り込め詐欺が横行する現代の世相、老人問題などが面白おかしく描かれていて、ラストも面白い。2時間半の芝居だが、最初の1時間位は女優中心でテンポが悪い。女優の芝居はむずかしい。後半の俳優が出てきてから、テンポよく舞台が進んだ。脚本も後半にお婆さんがファッションショーをするまでセリフが刻みよく書かれている。全体的に演出家が芝居をわかっていると思うが、俳優陣にもう一つキャラが薄かった。無理のない演出で楽しませてもらった……

帰りの下り坂、三谷幸喜演出で、俳優が渡辺えり、柄本昭、温水洋一等のでこの作品を公演したら楽しい舞台かなと妄想した。最後に幕間の音楽効果はすばらしいです。音楽が芝居のテンポを作っていた、流石ですね、情野さん！

Y.S. ベアフットシアター フランク三浦

## 劇団横濱にゆうくりあ

「モノローグの可能性2018」

2018年11月10日～11日 於:青少年センター2階 HIKARI

「モノローグの可能性」は、映像への挑戦などユニークな表現活動を展開する横濱にゆうくりあにとって、もう一つの個性的な演劇的試みだ。役者はたった独りで作品を背負わ



なければならない。単に出演が一人だけのいわゆる「ひとり芝居」というにとどまらず、台本から演出プランまでをすべて一人だけで勝負するというコンセプトなのである。制約は多かったが、まったく味わいの異なる作品構成は興味深いものがあつた。

トップを務めたのは、植川真衣の「ミナトマチ・アンチェインド・メロディ」。劇団の最若手で、舞台経験はほぼないに等しい彼女にとって相当なプレッシャーだったようだ。しかし、芝居が始まってほどなく緊張が解けていく感じが見て取れた。年頃の女の子なら誰でも心の中に抱きそうな淡い妄想を自然体で演じられたのではないか。流れにメリハリをつけることと、声量と台詞の質感を高めることが今後の課題といえよう。

二番手は井上博之の「散華」。特攻で散った父と、その思いを胸にモーレツビジネスマンとして現代に生きる息子との想いの交錯を時間を行きつ戻りつしながら演じ分けることがテーマであったはずだが、結果は果たして？手強いテーマで、しかも想定外の負傷により一步も動けない状況

での舞台となり、集中力が途切れないようにすることが大変だったのではないかと。それでも半世紀の時空を父と子が行き来するという試みへの挑戦は評価できる。

三番手は、はや中堅になろうとする櫻井マリアの「ヨコハマの朝そして紅い薔薇の花」。残念ながら、他の三作品に比べて歩留まりで、一步遅れを取った感がある。一番手の作品以外は、すべて二人の人物を演じ分けるという共通のコンセプトを持っていたが、演じ分けの演技力以前に作品のコンセプトの煮詰めができていなかったようだ。恐らく4作品の中ではもっとも稽古時間が足りなかったであろうことを露呈した。次回に期待。

トリを飾ったのは、ベテランの味わいさえ感じさせるジョニーの「シューシャインボーイとサリーちゃんの冒険」。戦後の一つの象徴的風景ともいえるシューシャインボーイのつぶやきを現代にフィードバックさせ、そこに人気キャラクター、魔法使いサリーちゃんがコラボするという何ともシュールな作品だった。ただ台本の最終的な落とし込みが公演直前、という時間的制約が仕上がりに影響した点は否めなかった。特にシューシャインボーイとサリーちゃんの衣装替えが何度かあって、その間の間延びが辛い。芝居全体のテンションを削ぐ結果につながるので残念だった。とはいえ、なんともほんわかとしたテイストが共感を得ていたのはベテランの味わいか。

劇団横濱にゆうくりあ 吉浜直樹

## 劇団かに座

「雰囲気のある死体」作:別役実、演出:馬場秀彦

2018年11月30日~12月2日 於:関内ホール・小ホール

**別** 役作品である。オンタイムで見えていない世代としては、別役作品は芝居のワークショップ等でセリフの一部分を練習テキストとして読んだことがある程度の認識しかない。(とても失礼な話だが事実そういう認識でした)



劇団かに座はこの公演が117回公演というとても歴史のある劇団なので別役作品初観劇にはふさわしい劇団であろう、初体験にはふさわしい機会だと胸躍らせて会場の横浜関内ホールに

向かいました。

病室を見事に再現した舞台はさすが老舗劇団と感心させられました。「雰囲気のある死体」とはどんな死体なのだろう、「雰囲気のある死体」というタイトルがすでに「雰囲気のあるタイトル」だな、などと余計なことを考えながら開演を待つ。

いざ開幕するとセリフの言い回しが非常に古めかしい、かなり原作に忠実に演出された芝居の作りなのだろうとすぐに感じとれた。現代的なアレンジやアドリブを一切排除した忠実な別役作品なのだろうと気づき、背筋を伸ばしてしっかりと観劇しなければと勝手に気負ってしまう。ユーモアもたっぷりに話は進んでいくのでとても楽しい、だからこそ演じる役者は相当稽古を重ねてきたのだろうと思われる。自身は笑いやエンタメが好きでそういう芝居を好み観劇したり、そういう作品を作ろうとしている、そこでいわゆる「不条理劇」である。観劇した後一緒に見に行った年が20も下の劇団員は僕の顔を見て「こういう笑い嫌いでしょ？」と開口一番言ってきた。答えはノーである、大好きです。笑いやエンタメは時とともに変わっていく、その歴史の中の不条理劇を一切現代に媚びることなく上演できるのは、その時代を生き抜いてきた劇団かに座にしかできないと感じました。

観劇後は古典芸術を見た後の圧倒的なパワーにやられたような気持ち良さを覚えました。演劇に対して真摯に取り組んでいる先輩劇団の生き様を、かつこいい背中を見せてもらった公演でした。

プラスチックな月 福本ぷう之介

## 編集後記

1962年11月に開館した神奈川県立青少年センターが、55周年を迎えた節目としてホール(1階)と多目的プラザ(2階)の愛称を募集し、それぞれ「紅葉坂ホール」「スタジオHIKARI」と決定し、神奈川県立青少年の健全育成の場として大きく動き出す年となりました。そして神奈川県演劇連盟も、これからの演劇業界の未来を

担う団体の加入が増えた年となりました。今回のDRAMAかながわは主に2018年度の活動報告として76号と77号の同時発行とさせて頂きました。年4回の発行を目指し、今後は連盟の活動内容はもちろんのこと、各団体の情報も今まで以上に盛り込んでいきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。 劇団かに座 永坂貴教

### 神奈川県演劇連盟加盟団体(50音順)

- 演劇プロデュース『螺旋階段』●ガムシャニズム●京浜協同劇団●劇団蒼い群●劇団河童座●劇団かに座●劇団唐ゼミ☆
- 劇団こゆるぎ座●劇団820製作所●劇団「無題」●劇団よこはま壱座●劇団横濱にゆうくりあ●G/9-Project
- studio salt●TEAM IMITATION●虹の素●プラスチックな月●マシュマロ・ウェーブ●まりこ☆みゆーじあむ
- M.PinK(ミュージカルプロジェクトin 神奈川)●ムームー企画●Y.S.ベアフットシアター●横浜小劇場(横浜演劇研究所付属)

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.org/>

DRAMAかながわ[第76号] 発行日:2019年9月30日 発行:神奈川県演劇連盟  
編集:永坂貴教(劇団かに座)・吉浜直樹(劇団横濱にゆうくりあ)・穂村一彦(劇団「無題」)・緑慎一郎(演劇プロデュース『螺旋階段』)